

心に響く銅錫合金の音——梵鐘



同社で製造された広島・平和の鐘

「柿食へば、鐘が鳴るなり法隆寺」澄み切った秋空に、ふと目を閉じるとどこからか、鐘の音が聞こえてきそうである。

だれの耳にもなつかしく残っているお寺の鐘——梵鐘の音。このなつかしい音を作りつづけているのが富山県高岡市である。わが国の梵鐘の大多数を同市が製造しているといっても過言ではない。高岡では古くから独自の鑄造技術を有しており、加賀藩の武家工芸技術を積極的に吸収して飛躍的にその質を高めていった。

梵鐘は、古くからある「双型鑄造法」で作られるのが一般的だ。円筒形、円すい形など回転体の形状に適している。古くは銅鐸の製

- 造にも利用された鑄造法である。
- 梵鐘の製造は
- (1) 製作図作成 製品原寸大の図面を書き、アウトライン、中子（内型）ライン、表面の模様、重量等を決定する
 - (2) 外型製作 真土を用いてアウトラインを作成し、模様等を施す
 - (3) 型組み 各部の肉厚のパランスを確認しながら型を組み上げる
 - (4) 溶解・鑄込み 銅合金を約一二〇〇度に溶解し、溶湯を一一〇〇〜一〇八〇度に落として鑄型に流し込む
 - (5) 型バラシ・仕上げ 鑄込みから一昼夜おいてから型をバラす
 - (6) 色つけ・着色 塗装し仕

上げる

(7) 据付け
の手順で行われる。一般的に設計から据付けに至るまで四〜五ヶ月かかるという。梵鐘づくりで最も大切とされるのが、その「音」だ。「梵鐘の老子」と言われるほど、梵鐘づくりで全国に名を馳せてきた株式会社老子製作所・元井 實社長は、「設計段階で音は決まる。大きさ、肉厚、合金の硬さなどで余韻のあるなしは決まってしまう。電気銅を使つたものは音はよくない。それに比べスクラップ材を使ったものはよい音が出る。金属の組成のためと思われるが、おもしろい傾向だ。世界的に見ても宗教にかかわる鐘、たとえば西欧の教会の鐘をとつても、そのほとんどが銅合金だ。古くから楽器に銅が使われてきた

ように、銅は実によい音を生み出す。心にしみ入る音といつてもいい。宗教の荘厳さを演出しているのかもしれない」

ちょうど同社工場では、鑄込みの最中だ。一二〇〇度の溶湯にワラ灰が入れられる。このワラ灰は、酸化を防止し、不純物を浮かせ、しかも保温の役割も果たしている。溶湯の温度が落ちてくると、一気に鑄型に流し込まれる。あと数日でひとつの梵鐘が誕生する。どこのお寺のシンボルとなるのだろうか。

ちなみに梵鐘は「口」と数えられる。年間百口近くを製造する老子製作所。

元井社長は「若手を育てなければ、この技術が絶えてしまう。若い連中が老子の伝統をさらに発展させてくれるだろう」と結ばれた。



外型の模様つけ



「乳」の型製造



鑄込み



溶解



型組み



老子製作所・元井 實社長